地鳴り

発行１９８５年１２月１５日　第２巻１４号

日帝＝中曽根の『戦後政治の総決算』

軍拡、経済侵略路線を許すな！　中路康雄……1

北海道征服とアイヌ同化とを合理化

高倉『アイヌ政策史』批判　橘　正伸……6

どこまで〈逃走〉できるか？

〈新しい知〉の迷走を解剖する　田島　隆……13

庶民から“先進国市民”へ

吉本隆明における経済成長の結果と展望

山辺甲平……15

日帝=中曽根の『戦後政治の総決算』

軍拡, 経済侵略路線を許すな！

中 路 康 雄

第１章　日帝＝中曽根の軍事大国化路線

日帝＝中曽根は、持ち前のタカ派路線を露骨に実践している。

それは、軍事大国化路線として一貫している。靖国神社公式参拝に端的に表現されている傲慢さは、これまでの歴代首相の、欺瞞的なものとはいえ、反対世論の動向を意識した参拝に比べても、その路線の危険性が、暴露されている。

日帝＝中曽根は、かつて彼が防衛庁長官時代に策定した第４次防衛力整備計画による自衛隊の近代兵器装備を着々とおしすすめている。新型戦車、Ｆ15戦闘機ヘリ搭載護衛艦、ミサイル艦、対潜哨戒機、空中警戒機等、列挙にいとまがない位である（別表参照）。

日帝＝中曽根は、これまた歴代首相が軍事問題を積極的に展開するのを回避していたのに比しても、異色である。面向きは日本だけの専守防衛を掲げてきた、これまでの方針を払いのけ、極東・太平洋地域の戦略的防衛（力）構想を就任当時から標榜している。それは「日本列島不沈空母」発言以来、日帝＝中曽根の念頭から消えることのない政治大国（彼は「国際国家」と表現している）への道と随伴する軍事拡大路線なのである。このような路線は、今年度の防衛白書に具体化されている。

白書では、日本の地理的条件がソ連の太平洋進出の障壁としての、戦略的重要性を持つことを明記し、日米安保体制や核戦略時代の自衛隊の意義を強調している。そして今年度の白書のきわだった点は、洋上撃破論として展開される「海洋空軍」構想である。59中業では、超水平線レーダー・エイジス艦・パトリオット＝ミサイル、空中給油機等々の導入が計画されている。これが実行されると、当然ＧＮＰ１％枠に収まるはずがない。

日帝＝中曽根は、同構想を具体化するためにも、この１％枠突破をだましうちで、なし崩し的に実施した。59中業の政府計画への格上げと、総額明示方式とは自民党内の慎重論をはねのけて、実行に移されたのである。

ところで日帝＝中曽根は、「戦後政治の総決算」と称し、行政改革と教育改革をスローガン化し、「新国家主義」とか「新民族主義」とも呼ぶべき新国家像を打ちだしている。

中曽根首相の思想は、奇妙にも梅原猛らの「日本学」と重なりあう。「戦後40年、この時期となってもう一度、日本のアイデンティティーを作る時にきている日本中の学者に、最も科学的な根拠をもった日本のアイデンティティーを確立する日本学というものを作ってもらいたい」（７月27日・自民党軽井沢セミナー）という彼の主張は、どうも梅原ら京都学派に対して向けられたもの、と思われる。

第２章　経済白書に見る帝国主義的侵略性

軍事大国化（国際国家）路線は今年度の経済白書にも、憶面もなく掲げられている。それは同白書の第２章「新しい成長の時代」として、特に第５節「太平洋地域の高成長」でとりあげられている。その地域とは、日本のほか、アメリカ・カナダ・オセアニア・韓国・台湾・香港・シンガポール・東南アジア諸国で、開放政策をとる中国の経済成長率も、世界の他地域よりも高く、際だっている、と分析する。そして、これら地域の一体性を、しかも日帝のヘゲモニー下の一体性を強調しているのは、経済覇権確立の野心が見えている。

今年の白書に、ことさらに＜「環太平洋地域」の発展が新たな日本の成長の条件である＞としているのは、「国際国家路線」の経済面での具体化である。

以下、同白書に立ち入って検討してみよう。

白書は、これまでの環大西洋地域から環太平洋地域に、世界経済の中心が移ったことを強調している。環太平洋地域のとりわけ東アジア・東南アジアのＮＩＣｓ諸国の成長の高さを評価し、アメリカでも経済力の中心は＜大西洋側から太平洋側に移動している＞ことを例としてあげている。

そして中国の開放政策やプライス・メカニズムの活用による成長は、最近10年間では年率６％に達していると評価し、これらの地域の経済交流の拡大について例証する。しかし、これら東アジア諸国の成長は、実は日帝の侵略性を裏付けており、それ故に日帝の安定性が確保されている――ということを白書ははしなくも暴露してしまっているのである。

なぜならば、日帝がオイル・「ショック」後の深刻な不況を乗りきり、“安定成長”をとげているのは、輸出増加による以外の何ものでもないからである。特に、対米・対東アジア諸国輸出が大きな比重を持っているのである。

同時にこのことが、対外赤字に苦しむ米帝と日帝とのあつれきになっていることはいうまでもない（白書ではこのことを「アメリカの工業の供給力不足や新技術製品の工業力の欠如をカバーした」などと述べている）。アジアＮＩＣｓ諸国へは、資本財や部品の輸出が中心であるこれらの国が自国の重化学工業を支えていくには、日本からの輸入器械設備に頼らざるを得ない現状を白書は紹介する。また、その生産に高度技術を必要とする部品（エレクトロニクス製品等）や素材なども日本から輸入せざるを得ない現状も白書は紹介している。

これは、これら諸国の内需や対米輸出

表　太平洋主要諸国の実質ＧＤＰ・輸出の推移　（単位：％）

	実質ＧＤＰの年平均伸び率			輸出の年平均伸び率			ＧＤＰに占める輸出比率		
	1950～60年	60～70	70～81	50～60	60～70	70～81	50～60	60～70	70～81
（先進国）									
アメリカ	3.2	4.3	2.9	5.3	6.2	6.4	4.9	5.2	8.3
カナダ	4.7	5.6	3.7	3.8	9.5	4.1	19.0	20.6	25.7
オーストラリア	3.9	5.6	2.8	5.0	6.7	3.6	18.8	15.2	16.2
ニュージーランド	2.4	3.6	2.0	2.6	5.2	4.3	25.7	22.6	26.8
日本	6.4	10.4	4.5	10.6	15.8	10.7	10.9	10.2	12.8
（アジアＮＩＣＳ）									
韓国	5.1	8.6	9.0	7.1	29.3	20.5	2.8	11.3	33.6
台湾	7.6	9.6	9.2	—	20.1	17.0	—	21.6	49.8
香港	9.2	10.0	10.0	—	12.5	10.3	—	92.9	101.3
シンガポール	—	8.8	8.6	—	7.1	11.9	163.1	126.7	166.7
（ＡＳＥＡＮ）									
インドネシア	4.0	3.9	7.8	4.9	3.6	6.8	—	10.9	26.2
マレーシア	3.6	6.5	7.8	—	5.8	8.2	53.3	44.6	51.6
フィリピン	6.5	5.1	6.2	3.9	5.8	7.2	12.0	15.8	19.2
タイ	5.7	8.4	7.2	5.4	10.5	9.4	19.6	18.0	22.1
中国	—	—	5.0	—	—	20.2	—	—	7.0
（中南米）									
メキシコ	5.6	7.6	6.5	4.5	5.4	8.2	12.9	9.1	10.7
ペルー	5.5	4.9	3.1	9.6	3.2	▲0.3	19.1	17.4	19.5
エクアドル	—	4.4	8.6	—	▲0.1	10.4	16.1	14.9	24.1
コロンビア	4.6	5.1	5.6	4.9	3.8	5.3	13.9	12.8	15.1
（参考）（ヨーロッパ）									
イギリス	2.4	2.9	1.7	3.0	4.8	4.0	22.8	21.0	27.9
フランス	4.5	5.5	3.3	7.0	8.4	7.6	14.5	14.2	20.7
ドイツ	8.7	4.4	2.6	15.1	8.2	6.0	17.9	19.6	25.2
世界				4.3	7.9	5.7			

（備考）World Bank "World Tables: The Third Edition, 1984" 及び台湾については "Taiwan Statistical Data Book 1984"，世界については ＩＭＦ "International Financial Statistics" より作成

中期防衛力整備計画完成時の勢力

				「防衛計画の大綱」	昭和60年度発注分完成時	新計画完成時
陸上自衛隊	自衛官定数			18万人	18万	18万
	基幹部隊	平時地域配備する部隊		12個師団	12	12
				2個混成団	2	2
		機動運用部隊		1個機甲師団	1	1
				1個特科団	1	1
				1個空てい団	1	1
				1個教導団	1	1
				1個ヘリコプター団	1	1
		低空域防空用地対空誘導弾部隊		8個高射特科群	8	8
海上自衛隊	基幹部隊	対潜水上艦艇部隊（機動運用）		4個護衛隊群	4	4
		対潜水上艦艇部隊（地方隊）		10個隊	10	10
		潜水艦部隊		6個隊	6	6
		掃海部隊		2個掃海隊群	2	2
		陸上対潜機部隊		16個隊	14	16
	主要装備	対潜水上艦艇		約60隻	58	62
		潜水艦		16隻	14	16
		作戦用航空機		約220機	145	214
航空自衛隊	基幹部隊	航空警戒管制部隊		28個警戒群	28	28
		迎撃戦闘機部隊		10個飛行隊	10	10
		支援戦闘機部隊		3個飛行隊	3	3
		航空偵察部隊		1個飛行隊	1	1
		航空輸送部隊		3個飛行隊	3	3
		警戒飛行部隊		1個飛行隊	1	1
		高空域防空用地対空誘	導部隊	6個高射群	6	6
	主要装備	作戦用航空機		約430機	372	415

が伸びるほど、日本からの輸出に頼らざるを得ない、すなわちＮＩＣｓ諸国の産業構造が高度化するほど、対日輸入の増加は避けられないということである。

経済的にこれほど優位に立つ日帝にとって、これを通しての政治的覇権・軍事的覇権への道を準備しないということは考えられない。

環太平洋地域での、日帝ヘゲモニー下の経済発展は、大西洋文明圏を追い抜く太平洋文明圏の実現に結実する、と日帝＝中曽根は夢想しているのである。

第３章　行革・民営化の「大統領的」ゴリ押し

「戦後政治の総決算」は行革がその柱となっている。しかし実際には、官僚の天下りの受け皿としての公団・事業団の改革については、その対象としては二の次にされ、「膨大な赤字」をかかえる国鉄をその標的とした、きわめて階級的なものとなっている。そもそも、「膨大な赤字」自体、政府・自民党の責任でありその腐敗した体質の産物である。それを温存しておいて、「赤字」の責任が国鉄労働者のみにあるかのようなキャンペーンがおこなわれている。そのキャンペーンによると、公営企業の民営化は世界的風潮のように宣伝されているが、事実はまさにその逆である。

現在、西ヨーロッパ（イギリスを除く）ではいわゆるパブリック・セクター（公共企業）の復活が、その風潮となっているのが事実である。例えば、技術開発・技術革新・いわゆるイノベーション・その地域にみあった産業政策と、その根幹になる技術の開発・コンサルティング・雇用対策等、市場経済的にはできないことを、地域でパブリック・セクターがやっていく――これが実は世界の風潮である。またアメリカでも、州レベルでこうしたパブリック・セクターが続出している。日帝・マスコミあげての民営化宣伝・論調はあきらかに嘘である。

民営化による「活力」なるもので、国鉄は政府・自民党によって改善はされないであろう。国鉄労働者は労使の現場協議を防衛するばかりでなく、その強化を追求し、労働者の自己権力をめざす闘いが今、決定的に問われているのである。

また電電公社の民営化も、御都合主義的な経営形態の変更であり、これを口実とした経営側ヘゲモニーによる＜新秩序＞確立がその本音であり、なんらの改革にもならないであろう。

第４章　日帝・中曽根の三里塚空港＝二期工事強行

日帝・権力は（1972年の）９・16東峰十字路闘争を担った、反対同盟・青行隊を中心とする仲間に対して、懲役１０年をはじめとする重罪求刑攻撃をかけてきている。これは、きり崩しても・きり崩しても依然として崩れることのない三里塚空港反対闘争に対する、政府・公団側の意向をくんだ報復攻撃である。

石橋・元反対同盟副委員長などの、用地内農家のきり崩しに一部成功したことと、折からの反対同盟の分裂とを、好機として、二期工事開始がもくろまれているのである。とくに、反対同盟の北原派・熱田派への分裂は、日帝の思惑どおりだった。成田用水はたしかに、反対同盟を動揺させた。これをきっかけとして、反対同盟は二つに分裂した。二つの反対同盟であっても、全国の反政府・反権力を闘う仲間達のはげましと支援はとだえはしなかった。分裂は修復されていないが、依然として戦闘の機運は確固として存在している。

東峰重罪求刑攻撃は、これに対する報復である。しかも、東峰十字路戦闘に関する事実は無視して、青行隊を中心としたメンバー――しかも現役で活動中のメンバー――に重点的に重罪を求刑するという、きわめて意図的なものである。

この９・16東峰十字路闘争は、革命的諸派によって敢行された戦闘であり、その過程で機動隊員３人がせん滅され、死に至ったものである。青行隊はたしかにその戦闘の一部を担ったではあろうが、「実行行為」は担っていなかった。

そもそも政府・公団に現地で反対して闘う農民とその支援者を裁く資格はない

裁かれるべきは、現地農民の生活を踏みにじって空港建設を強行した日帝＝政府・公団なのだ。

本年８月28日の運輸省・公団の86年度概算要求は、第５次空港整備５ヶ年計画に基づいて90年度Ｂ・Ｃ滑走路供用をめざす、としている。二期工事着工強行の宣言である。この「５空整」も、これまでの20年の闘いがその存在をやめないかぎり、実現はありえないであろう。

「三里塚空港に死を！」。

高倉新一郎『アイヌ政策史』批判

北海道征服とアイヌ同化とを合理化

橘　正　伸

多分松前藩のころ、あの北海道へ派遣がありまして、それからずっといわゆるアイヌの方々がだんだん圧迫されるような形で、それから明治以降に統合されて日本国籍に入ってこられたというふうに聞いております。

世耕国務大臣。1982年2月27日、衆議院予算委員会第三分科会。

侵略・併合の無総括

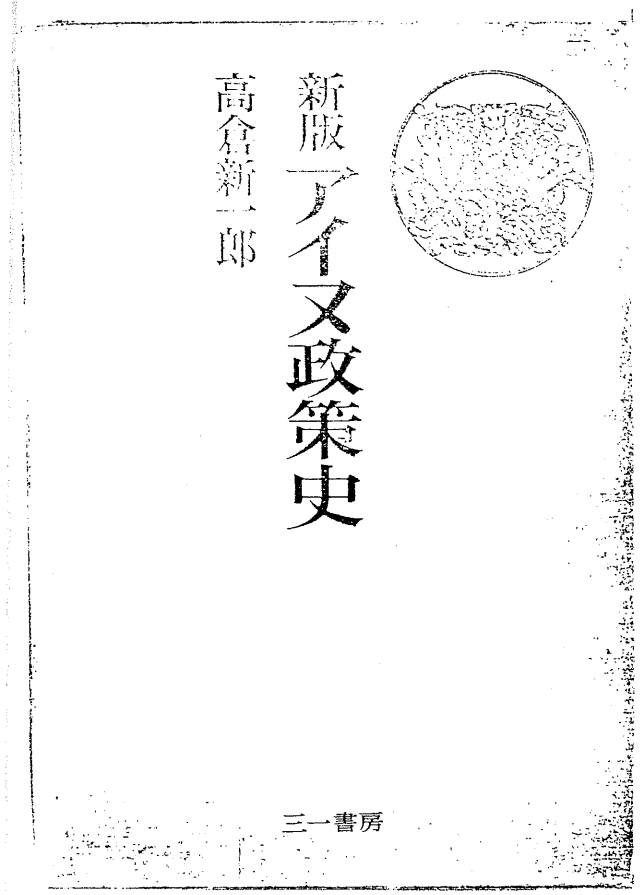
国内問題ではハト派的立場の人であっても、こと対外問題に関しては強硬なタカ派的見解を持つ――このようなことはしばしば見られるが、実際にその人の本音は対外政策にはっきりと表現される。たとえ、「革命的」政権であっても、そして「国内の」全民族の合意の上に立っ　た政府であっても、他民族抑圧的であるとすれば、そもそも「革命」の真価が疑われなければならない。

欧米の社会主義者も、その左派・急進派が海外植民地の放棄を明言したのを除けば、その右派・中央派は植民地維持を主張する現実主義者であった。日本の例えば大河内一男は「国際社会政策の必然性」を説くが、この「労働条件に関する或る程度の横断的な協定」（①）自体が「『労働力』経済上の非合理的な『濫用』」を回避するための、「『労働力』保全上における合理的配慮」（②）と考えられているのである。

①『大河内一男著作集』第１巻、55ページ。労働旬報社。
②同、27ページ。

このような「本来的な資本制経済の本質」（③）・資本の理性への限りない信頼に立つ以上その対外政策は楽観的なものとなり、海外植民地に関しても、現地労働力保全の合理性以上に問題はないことになる。

③大河内、前掲書、27ページ。



高倉新一郎：1902年、北海道帯広に生まれる。1946年、北海道大学農学部教授。北海学園大学教授、北海学園大学学長。

ところで、高倉新一郎とその著書『アイヌ政策』とは、アイヌ「問題」に関しては権威である。彼は1946年に北海道大学の農学部教授に、その後北海学園大学の学長になった。「アイヌ研究といえば『高倉先生』であり、第一人者とされてきた」（④）。『北海道警察史』編纂の時（1968年）も、警察では彼に「顧問となっていただき、いろいろ指導を受けた」（⑤）という。

④、⑤『抑圧の歴史を解放の歴史に』19ページ、22ページ。アイヌ民族解放研究会、1978年。

高倉新一郎ははじめから現実主義である。彼は、日本によるアイヌ・モシリ＝北海道侵略過程の歴史的事実はそれ自体としては部分的に認める。しかし、もともと　帝国主義的侵略・併合の結果を否定的に考えていない（⑥）ために、まず第一に、８世紀以来の「日本政府の対蝦夷政策」では、あたかもその「土人政策」が友好的・協調的であったかのように述べるのである（⑦）。

⑥台湾・澎湖島領有、南樺太獲得、朝鮮併合によって朝鮮人・台湾人・高砂族・樺太アイヌ「を新たな同胞として迎

えた」と、平然と述べるのである。高倉新一郎『アイヌ政策史』、17ページ。三一書房、1972年。

⑦当初は「使臣派遣」による「服従」策であり、その後「朝廷はその地の土人たる蝦夷の撫育・保護に頗る努め、渡嶋の蝦夷もまたその恩沢に服し、概ね平穏で、しばしば京都に朝貢した」とし、叛乱はほとんどなかったとする（同、24ページ）。しかしこれは、天皇国家による蝦夷征伐に対するアザマロの反乱（780年）・アテルイの戦い（789年）を考えただけでも事実に反する。

これでは日本人とアイヌとは「昔からの隣人といった理解にまで到達し」（⑧）かねないほどである。

⑧高倉、前掲書、4ページ。

また第二には、「北海道旧土人保護法」実施をもって「北海道が植民地的性質を失い始めた」（⑨）と考え、この時点以降アイヌは「一種の無能力者としてこれを保護」し、「アイヌを平和に、完全にわが同胞として吸収すること」（⑩）が残る問題だ――国内問題・社会政策の対象に過ぎない――というのである。

⑨高倉、前掲書、21ページ。

⑩高倉、前掲書、578ページ。

いずれも高倉が戦後になってさえ、帝国主義的侵略・併合を否定的に総括していないことの帰結である。わずかに「敗戦は私のこの著で意図した方向を断念せざるを得なくなった」、「戦後植民学という学問は従来の意味では用をなさなくなった」（⑪）とあるが、ただそれだけである。「意図した方向」も「断念」の内容も「従来の意味」も不明である。侵略・併合が「意図した方向」で、植民地の人民を“同胞として迎える”のを「断念」し、平和的に吸収することが「従来の意味」である――こう考えられるのはなんら悪意の解釈ではない。なぜはっきりと書かないのであろうか。

⑪高倉、前掲書、3ページ。

第一版序文によれば「アイヌの運命が私共の育った期間においてほとんど改善されなかったことに対する疑問と義憤にあった」（1ページ）とあるが、これではなおさら「方向」も「意味」もわからなくなる。そしてもっとわからないことは本『アイヌ政策史』全体をつうじて、この「疑問と義憤」が、どこにも表明されていないことである。あるいは「植民者の道徳的責任」（⑫）から抑制されたのであろうか。それとも読者が行間から読みとるべきものであり、以心伝心で感じられるはずのものなのであろうか。いずれにしろ、この表明は高倉によって回避されている。

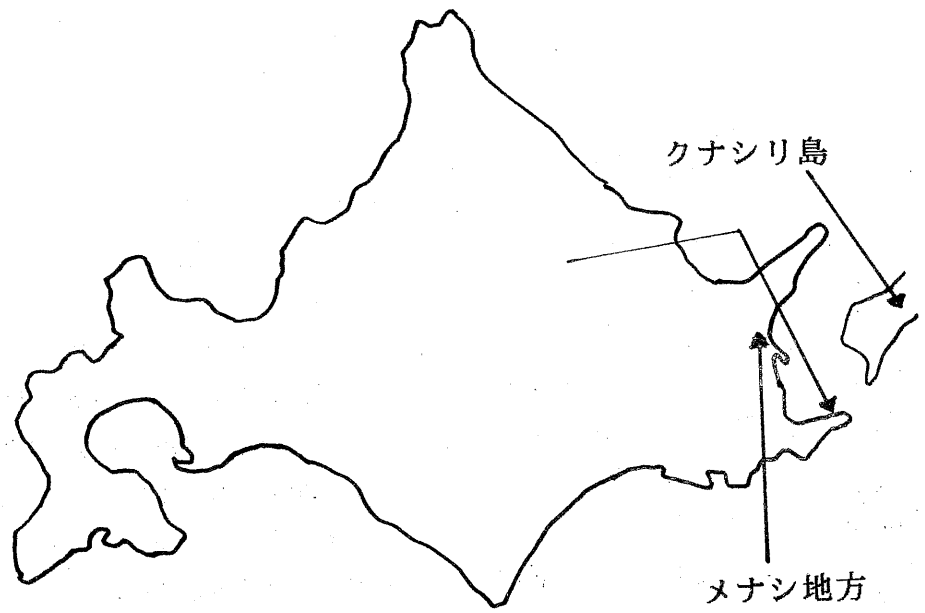
⑫高倉、前掲書、22ページ。

英語版と新版

同書は1961年英訳され（前半部のみ）『北部日本のアイヌ。征服と文化移入の研究』として、John A. Harrisonによって紹介された。原著には「征服」という表現は27ページと29ページの2箇所に見られるだけであるが、英訳書は書名でも日本人によるアイヌ民族の「征服」を明記している。白黒の決着をつけないのが日本的儀礼なのであろうか。

さらに同書の第一版は1942年刊であるが、新版＝第二版は1972年刊で、論旨はほとんど変わらないにもかかわらず、表現は細部にわたって訂正されている。主な訂正はつぎのとおりで、多岐にわたっている。

No	旧　　版	新　　版
1	原住者	土人(P.17 等)
2	アイヌ	土人(P.27 等)
3	奴隷	奴婢(P.44 等)
4	諸館相継いで陥り、内地人の根拠地はほとんど奪われ、	諸館相継いで陥り、内地人の根拠地はほとんど失われ、(P.26)
5	という事実は	という日本紀の記事は　(P.23)
6	他例と比較する	これ［政策］を批判する　(P.20)
7	今日――迄伝縦令名目上の問題であるとは言え将来において――	今日ではたとえ名目上の問題であるとしても、将来における　(P.22)
8	［なし］	［アイヌの一婦多妻についての註］(P.47)



8は新版序文の「どうしても付加せねばならないものは新しく註を加えることにし」（⑬）た、に相当することがうかがわれるが、1と2は果たして「未熟な表現と語句を訂正した」（⑭）ことになるかどうか疑問である。しかも4、5は批判を考慮したものと思われ、6はさも高倉が公認のアイヌ政策を「批判」したかのように配慮したことがうかがわれる

いずれにしても「一切は当時のままとし」（⑮）たというのは嘘である。率直に訂正理由をあきらかにできない事情があるのだろうか。

⑬、⑭、⑮高倉、前掲書、4ページ。

一体、高倉は「原住者」と「アイヌ」という語句を＜未熟＞と考えて「土人」に訂正したのであろうか。しかし北海道に関する学術的論文で、いわゆる「土人」をアイヌと書かないということはありえない。高倉の訂正理由が＜未熟＞さにあるとは考えられない。本当の訂正理由は、アイヌ民族自身による民族的自覚が高まるにつれて「アイヌ」という語句自体が差別的に使われている、との民族的告発を高倉が考慮したところにある。

この民族的告発は、一方ではたしかに同化論的な響きを持っていたとはいえ、差別の現実を突き出し、アイヌの民族的アイデンティティー形成に決定的役割を果たすものであった。今日ではアイヌという民族呼称が、いかに誇るべきものであるか、アイヌ民族自身から強調されている（⑯）ところであるが、それは「アイヌ」呼ばわりにこめられた侮辱を感じとるところから始まったのである。旧アイヌ協会はウタリ協会と名称変更された

だから高倉は「アイヌ」を「土人」と訂正したのであろう。「土人」ならば抗議を受けない、と彼は考えたと思われる。

⑯例えば萱野茂は、アイヌということばは人間という意味であり、しかも人間らしい人間・すぐれた人間という、誇るべき民族呼称だと述べている（『アイヌ通信』第11号、2ページ。アイヌ解放研究会、1983年）。

高倉の正体は、こうした「言い換え」をして抗議を避ける、というまさにその点にある。5の訂正は多分に学術的なものかもしれないが、4の訂正はそうとは言えない。「奪われ」を「失われ」に訂正したのは、無意識的な「内地人びいき」への訂正だからである。今日の教科書検定では、「奪われ」が「圧倒され」に訂正させられている（⑰）が、いずれも信略の歴史的事実の抹殺・「内地人」びいきへの訂正表現である。『新選・北海道史』にも同様の問題表現があり、学術的にも批判が出ていたところである。高倉はそうしたことをよく知っており、抗議を受けないように新版ではこっそり訂正した。しかし訂正したことは明らかにせず、

「一切は当時のままとし」たことにした。明らかにすると、その訂正理由をめぐって抗議を受けかねない、から。

かくして高倉の正体は、「内地人」からドジンをみるアイヌ政策論にある。

⑰1982年、教科書検定・高校日本史に関して、北海道ウタリ協会は8月28日、文部省に抗議した。アイヌ記述に関して、検定で書き換えられたのは、「アイヌの狩猟権、漁業権や山林伐採権を奪い、日本人への同化を強制した」部分が「アイヌの生活を支えてきた狩猟や漁業などは内地人に圧倒され、日本人への同化が求められた」となった箇所である。

日本版ウェークフィールド

高倉によるアイヌ政策論は、まるっきり＜日本人による未開地開拓論＞に染めあげられてしまっているわけではない。たしかに原住民・アイヌ民族の存在は、それ自体として部分的ではあれ、対象に設定されており、どこかの不用意な大学教授のようにこれを“捨象”したりはしない。しかし彼の核心が、先に見たとおりであるから、植民地における原住民に関する事実をそれなりに的確に指摘しながらも、真実に迫ることが彼にはできないのである。

例えば1789年のクナシリ蜂起（「寛政元年の蝦夷乱」）については、クナシリとメナシのアイヌの行動した事実がほとんどとりあげられていない。たしかに日本人によるアイヌ側の一般的交易条件悪化以上に、不当な「内地側」の収奪が指摘はされている（⑱）が、高倉をこの点で割引きはできない。この蜂起をめぐって「内地側」はそれ以上の、インディアンの頭の皮に100ポンドもの賞金をかけた「あの謹厳な、プロテスタントの先達、ニュー・イングランドの清教徒」（⑲）も顔負けの絶滅作戦をやってのけたのである。

⑱「内地側から与える品物の質や量に多くの詐術があった」（高倉前掲書、101ページ）。「平正内地人の蝦夷に対する態度がそれを敢えてしかねないほど残忍なものであったからであろう」（同、107ページ）。この指摘はまちがってはいない。

⑲K＝マルクス『資本論』第1巻第7編、第24章。

高倉も述べているとおり、この蜂起はいわば腰くだけであり、シャクシャイン蜂起（1669年）と違って「全く一戦にもおよばずに乱は鎮定した」（⑳）のであるが、――それにもかかわらず――編成された松前藩の征討軍・鉄砲装備の２６０人は、蜂起のリーダー３７人を処刑、首をはねて箱に塩詰めにし、胴は筵で包んで穴に埋めたのである。そして――その上さらに――数は不明だが大量虐殺もやっている。それを裏づけるかのように『斜里町史』によれば、1818年にクナシ

リのアイヌは一族が絶滅し、ゼロになっていたという。

⑳高倉、前掲書、109ページ。

そして高倉は、同書には収録しなかったが、アイヌの同化策には勧農が決定的であるという考察をした論文も書いており、日本版ウェークフィールドの役割を果たしてきたのである。組織的に植民し原住民は農民化すべし——これが旧版を書いた時に高倉が「意図した方向」ではなかったのか。それでも中央政府に＜まつろわず＞同化されないアイヌのことを「ほとんど改善されなかった」と言ったに過ぎなかったのではないだろうか（註）。

（註）高倉は1949年、「T部落の熊祭りに招ばれ」た時に「先生はウタリーだ。本当の仲間だ。」と言われた、と書いている。（「コタンを往く」。『アイヌ研究』12ページ。北大生協高倉記念出版委員会、1966年）。だがそのすぐ2行後に「よごれた欠け椀につがれた濁酒」に酔ったと書く神経さは反省すきである。親しみをこめて書いたつもりかもしれないが、「よごれた欠け椀」は日本人による征服・抑圧をひきずった現在の姿でもあるのだ。本当のウタリは、こんなことは書かないはずだ。

また、同『アイヌ研究』の題字裏に「こんな仕事に没頭させてくれた妻の愛情と労苦に感謝する」と書かれているが、「こんな仕事」とは一体どういうことであろうか。

こんな程度の学術的成果なるもので、政策提言されるのでは、日本の大臣が「北海道征服」のことを「北海道へ派遣」と、日本への同化・絶滅のことを「日本国籍にはいってこられた」と答弁するのも、無理からぬことである。

どこまで〈逃走〉できるか？

——〈新しい知〉の迷走を解剖する——

田島　隆

1.

40年前、敗戦に伴う既成の価値の大崩壊の中で、織田作之助は「堕ちよ。もっと堕ちよ！」と叫んだ。皇国意識に支えられてきた日本人の自己意識の解体を、「民主主義」「社[illegible]に乗り移ることにより繕おうとした知識人の「知」の底の浅さを激しく衝いたのである。

底なしに堕ちよ！と叫んだ織田自身には、敗戦がかいまみせた支配秩序の裂け目から、人間が人間を喰らう社会の本性が、まざまざとみえた。だが、理念の名において人を殺す時代とまっとうにそい寝した織田にとって、新しい理念＝知でで自己を救済するには、時代の刻印はあまりに強烈であった。誠実にデカダンスを生き、滅びるほかなかった。

織田の叫びを聞こえないふりをした＜戦後民主主義＞は、日本資本主義の高度成長を自己利益優先という形で支えた。その直接の延長線上の40年後の現在、内にあっては軽薄単小の先端技術を内臓し世界的に突出した資本蓄積機構と、外にあっては過渡期国家群の低迷と腐敗とを前にして、戦後（もはや戦後は「死語」だが）の二大理念、＜民主主義＞と＜社会主義＞は、根底からゆさぶられている

戦後の実存主義の流入と同じく、＜知＞の世界市場たるフランスから、構造主義やポスト・モダーンの＜知の衣装＞が既成の理念の根本的批判として登場するには充分な状況だ。

今や、＜逃走せよ。もっと軽やかに逃走せよ！＞と＜新しい知＞は叫ぶ。

彼らは果たして、織田ほどに自己に誠実で、＜逃走し続ける＞ことができるのか、それが「資本主義社会＝パラノ社会の基盤を堀り崩す（浅田彰『逃走論』）」すことになるのか。今、すこし「新しい知」を散策してみよう。

2.

「すべてのコトは疑い得る」というのは、新しい＜知＞を切り拓く前線にいる人間に不可欠なスタイルではある。既成の理念が、世界をその理念で解明しつくしたという惰性態＝抑圧態に陥る時、人間の認識能力（心体能力＝五感から頭脳にいたるまでの）の限界性を強調するこ

とは有効であり、健全なことでもある。

ヒュームの不可知論、カントの物自体の認識不可能論は、人間の認識能力の有限性を明らかにすることにより、人間の認識活動を神学から解放し、<市民社会>の具体的様相へその力を向かわせていたのであった。

資本主義社会のみならず、人間の自己解放に向かうと希望されていたソ連や中国の過渡期国家社会の抑圧性・腐敗・低迷ぶりがまざまざと明らかになった現在その批判は理念としての<民主主義>や<社会主義＝マルクス主義>にとどまることはできず、理念の担い手としての<近代的理性>や<人間>そのものに焦点があてられていたのである。

とどまることを知らない核兵器の増強・自然環境破壊は、社会体制の違いをこえて、人類そのものの危機を現象している。そうした最先端技術＝軍事技術の暴走と、<理性>を実現するとみなされてきた<社会主義>の低迷に勇気づけられた<新しい知>は、<理性>とその担い手たる<人間>への根本的批難を叫ばずにはいられないのである。すべての“イデオロギーが終えん”し、後にはまがまがしい存在としての“人間”への不信のみが残ったわけである。まことに世紀末にはふさわしい<知>のあり方ではある

3．

<新しい知>による<理性>批判は、その内実において、マルクス主義批判とほとんど重なりあうものである。だから存在が意識を決定する、という公準に根本的疑念が向けられるのは当然のなりゆきではある。<新しい知>は、意識活動の根幹としての言語活動を基底に置き、“言語＝意識が存在を規定する”側面を強調する。

ソシュール言語学が登場するゆえんである。

ソシュールによれば、言語とは第一に恣意的なものであり（犬とよぶか、ドッグとよぶか、あるものにどんな音韻をあてはめるかは、あるものにとってもなんの必然性もない）、第二に「差異の体系」である。言語の意味は、他との関係の中でのみ決定される（たとえば犬は、狼や猫との差異によって、兄は姉や妹や弟や家族との関係の中で）。しかもこうした関係性の<網の目>は、全体的関連において共時的に、いっきょ的に存立する。

こうした“構造”を指して、ソシュールはラングとよび、そうしたラングのもとで個々人が行う言語活動をパロールと称した。記号表現（シニフィアン）と意味内容（シニフィエ）の間に、なんの必然性もない。だからラングは、共同規範としてパロールに対して専制的にふるまうが、パロールにより変化していくことが可能だとする。

ソシュール言語学を<新しい知>が持ちあげるのは、対象と言語との間にはズレがある、一個のコトバとその対象の間にはぴたっとした対応関係はない、いやむしろ、対象自体がコトバの網の目ではじめてとらえられる（犬の吠えるのがワンワンときこえるか、バウバウときこえるか、はそれに先立つコトバがきめる）側面に、客観的実在論を批判する視点をみいだしているからである。（つづく）

庶民から“先進国市民”へ

吉本隆明における経済成長の結果と展望

山辺甲平

昨84年夏、吉本隆明は大岡昇平に一つの訂正を申入れた。大岡が埴谷雄高との対談『二人の同時代史』(岩波）で、60年安保〈六・一五闘争〉の吉本についてふれていることが事実に反する、と吉本は指摘した。

大岡と埴谷は次のように対談している。

「 **埴谷**

吉本も押し出されて敗走したんだが、追われた道路のはしでやっと塀を越えて逃げ込んだところが警視庁の中だったんだ（笑）。それで吉本は捕まっちゃったんだが、それを花田清輝は戯文詩に書いた。「逃げた先が警視庁」というようにね。花田も、吉本・花田論争をまだ根にもっていてね。

大岡 あれはおもしろいね。ケチのつけ方が。吉本はスパイで、だから警視庁の玄関から降りて来た、とかね（笑)。

埴谷 そうだったかな。

大岡 釈放されて出てくるんなら、玄関から出て来たっていいと思ったけれどね。あの論争は、ちょっと花田に分がなかったからな。」

大岡は吉本の訂正申し入れを受けて84年10月15日第三刷で問題になった個所を次のように訂正した。

大岡 あのころはいろんなうわさが乱れとんだからな、吉本が警視庁の玄関から降りて来た、とかね（笑)。」

だが、この訂正を不満とした吉本は『試行』63号)(84年11月発行）で、大岡、埴谷に対する〈私信〉の関係を公然論争に切り替えた。吉本は言う。

「左翼だとおもったり進歩だとおもったりしているこの二人の老文学者たちの発言に、納得づくで訂正を申しいれているこのおれの姿と態度が、六〇年安保闘争の延長線上に位置した八四年現在における、もっとも正統なたたかいの姿と態度だということを読者に知ってもらいてぇよ。」

「こんなものが正確な内容だなどと錯覚されたまま、尊敬すべき老文学者た

ちにゴールに逃げこまれ、それをまた国文学の研究者などが有難がって本気になどされたら目もあてられないからな。」

留置場でしゃべる必要？

■60年安保闘争と吉本

吉本は、研究者に「本気になどされたら目もあてられない」とし、「六〇年安保闘争の延長線上に位置した八四年現在における、もっとも正統なたたかいの姿と態度」をとるものとして、大岡、埴谷に訂正を要求するのであるが、「八四年現在」はともあれ、まず、「六〇年安保」における吉本の闘いを吉本自身が訂正要求に付帯させて提出している資料（『試行』再録）自体に即して確認してみよう。

吉本は、花田の戯文詩「風の方向」を資料に付し、“塀を乗りこえて逃げこんだ先が警視庁”と花田が吉本をからかった事実はあるが花田は「吉本はスパイで、だから警視庁の玄関から降りてきた」とはどこにもいっていない、と語る。またタイホされてのちは高井戸署にまわされ、高井戸署で不起訴・釈放になったことをのべている。そして、タイホ後と釈放時の状況について、吉本がかつて『読書人』（1961年11月27日号）に書いた「六・一五事件と私」を資料として提示する。

この文章は、花田等当時の日共系の吉本批判（警察に逃げこんだ、警察に頭を下げた……）に対する当時の吉本の反論であるが、吉本は次のようにのべている。

「花田の文章の拠点は週刊『コウロン』（昭和三十五年七月五日号）の金子鉄磨君のかいた記事「全学連主流派のブレーン」であるとおもえる。金子君は好意的な配慮をこめてかいている。

『残留組の署員たちは警察口調で、多子ちゃんを抱いた吉本氏に「良かった。おめでとう」と言葉をかけた。「どうもお世話になりました」と答える物腰はどう見ても闘士ではない。国鉄あたりに長年つとめた職員といった様子。』

記憶にあやまりなければ、これは事実にたいする金子君のやむをえない誤認である。こういう挨拶をかわしたのは、留置場内の同房のサギ師君や小盗君たちと一回、釈放されて階段を出口の方へ下りながら、出会い頭に取調べでなじみになった公安主任と一回である。友人諸君（奥野健男、橋川文三、週刊『コウロン』記者金子君、わたしの妻子もいた）と一緒に階段を下りながら『やあ、どうもお世話になりました』『やあ、よかったね、お目でとう』とのんびりした挨拶をかわして擦れちがったとしたら、わたしとわが敵君のしゃくしゃくたる余裕を語る以外の何ものでもないことは自明ではないか。」

「……おなじく警視庁内でタイホされた三十数人の学生と写真をとられているあいだに、わたしは取調べにのぞむじぶんの方針を判断した。そこで第一夜、姓名だけを名乗り、住所、職業その他を黙否した。一夜かえらぬことで家人が他に累を及ぼさぬ配慮をするにちがいないとかんがえたからだ。第二日、はじめて住所、職業をあかした。わたしの調書にたいする方針は、一、わたしがあくまでも単独行動であるという線をまもること。二、新事実が取調べ側から立証されたときは単独行動であるという線が守られるかぎり（つまり他に累を及ぼさぬかぎり）小出しに認めること（自分からは出さぬこと）。三、行動組織及び他に累を及ぶにいたる線では完全に黙否すること。こういう線をこころに決めたわたしは、いささかスリルを覚えながら、まったく、スリルのある調書を与えた。

はじめの調書は、第三日目（と記憶する）、わたしが国会構内集会で演説したという新事実をつかんだ取調べ側によってくつがえされた。それは公知の事実であるため認めることにし、わたしが南門のなかへはいっていくと、顔見知りがいたらしく指名をうけて喋言っということで、第二のスリルある調書がつくられた。」

「わたしにしてみれば『やあ、お世話になりました』という余裕もあれば、『お元気で』という余裕もあったし、また、わが親愛なる敵君も『お目でとう』とか『よかったね』という余裕があったことはいうまでもない。

わたしは、どんな譲歩もどんな他への不利益も行なってないし、わたしの行動組織について完全に黙否してきている。つまり、わたしは『代々木にたいして強く』なる権利も、花田清輝のような転向戦前派とたたかう権利も完全に保有しているというわけだ。」

吉本が述べる〈闘い〉の経過は、吉本という人物をよく示している。

一九六〇年六月十五日夕方、安保改定阻止を目ざしたわれわれは、最後の力をふりしぼって国会構内突入を試みたのであった。われわれは、南通用門からの突入が地理的に最も有利と判断し、放水をあびながらも南通用門のトラック・バリケードの解体を追求した。われわればバリケードを解体した。放水にはコンクリートの敷石を割ってつくった石で応戦。われわれの猛攻に機動隊は動揺して後退、南通用門の内側にポッカリできた空間。われわれは進撃した。進撃したわれわれが機動隊に接近する直前、機動隊側は猛反撃を開始、警棒大乱打の中、ブント同盟員・樺美智子の命は奪われた。われわれは一度は構外に敗走させられたものの、再び態勢をととのえ、「女子学生死亡」で敵が構内に後退線をひくなか、再度国会構内に入った。われわれは機動隊に包囲されながら虐殺抗議・安保反対の集会を敢行した。吉本が車の上にあがって挨拶したのはこのときであった。吉本は急に指名されたのであろうか、とにかく吉本の話は何を述べているのやらはっきりしなかった。集会でわれわれは、正門前への移動を確認し、機動隊の包囲網にたちむかったが敗北した。再び警棒のメッタ打ちをあびてわれわれは構外に追い出された。しかし、われわれは戦意おとろえず、構外にひきずり出していたバリケード用トラックに火をつけ、さらには正門前に移動し、正門前のバリケード・トラックにも攻撃を加えた。

やがて、敵は催涙弾をわれわれに打ちこみはじめた。のみならず、国会構内からとび出して全面攻撃に転じてきた。われわれは退却以外に手がなかった。吉本

も追われたであろう。そして、逃げ込んだ〈空地〉が警視庁の構内だったのであろう。当時、日共系は、吉本を、警察に逃げ込んだ、と非難したりからかったりしたが、吉本が、暗闇の中、警棒に追われて逃げ込んだ〈空地〉がたまたま警視庁構内であったにすぎず、この点では、吉本は何ら批判さるべきものではない。

だが、タイホされて以降の吉本はどうか。名前を即日明かし、次の日には住所、も話したというのはさておくにしても、「新事実が取調べ側から立証されたときは、単独行動であるという線が守られるかぎり（つまり他に累を及ぼさぬかぎり）小出しに認めること（自分からは出さぬこと）」にしたとはどういうことか。すべては公判段階であらそえばよいことなのだ。なぜ、黙否で通さないのであろうか。〈敵が知っていることは小出しで認める〉必要など、なぜあるのか。このような調書を与えることがいかに敵を利し味方に不利益をもたらすか、戦前の共産党員の転向をするどく追及する吉本であれば、拷問を受けながらひとり一人が〈敵の知っていることを小出しに認める〉ことからはじまってやがてはそれら調書の相互活用と一層の拷問によって〈全面自供〉においやられていった経過をよく知っているはずだ。吉本は「行動組織」(文化人でつくっていた「六月行動委員会」のこと）の中身だけはしゃべらなかったとしているが、警察検察に対する吉本の姿勢をみるとき、これはどの程度吉本の強さを示しているのだろうか。樺美智子が虐殺され、負傷者は救急者で運ばれた者だけでも555名というあの大闘争の中でタイホされた吉本ではあるが、公安警察に対する吉本の姿勢には、闘った人間、頭を割られた仲間、殺された闘士にたいする連帯感、敵権力に対する憎悪がない。「やあ、お世話になりました」といって釈放されてきた吉本の脳裏にはそのとき流血の六・一五は存在しなかったのであろう。闘いのほとぼりもさめやらぬなかで「やあ、お世話になりました」という「余裕」とやらの感性をもつ人物が「戦前転向派とたたかう権利」を「完全に保有している」といえるのであろうか。

埴谷雄高は、吉本の批判を受けて85年２月号『海燕』で反論する際、その「手紙」の末尾部分でかなり唐突に吉本に対して「あなたは『臆病』だと自覚して下さい。弱い犬ほどよく吠える、という真実性を知って下さい。」と記している。

吉本はこの臆病説に対して『海燕』３月号で臆病と強さについて一般的考察を試みているが、埴谷はなぜ、臆病云々を「手紙」末尾に書かねばならなかったのであろうか。

吉本は、大岡に訂正を申入れるに際して、当時われわれが不快感をおぼえた「六・一五事件と私」を、「もっとも正統なたたかいの姿と態度」をもつ立場から再登場させているのであるが、〈逮捕ー拷問ー転向〉の経過をもつ「戦前転向派」の埴谷には、吉本のこの文章はどう映じるのであろうか。埴谷が唐突に臆病を云云した真意はうかがい知るところではないが、警察に「お世話になりました」といって出てきた自分を得々としゃべっている吉本に対して、たしかに《取調べ》問題は自分のタブーにもふれるがゆえに直接的には言及しえないにしても、取調べを受けている吉本の〈姿と態度〉に自分たち「戦前転向派」がやや暗く失笑せざるをえない臆病を見てとった、と判断すれば、それは読み込みすぎであろうか。

文学を楯に政治を踏絵に

■反核における埴谷と吉本

われわれは、六〇年安保六・一五をめぐる吉本の訂正要求についてかなり詳しくふれた。しかし、これは吉本と埴谷の論争の主点ではない。主論点の第一は、反核問題である。

埴谷雄高は81年秋、発起人の一人になって核戦争の危機に反対する文学者の「署名についてのお願い」を発表した。埴谷が発起人に加わった「お願い」は次のように述べている。

「……いまこそ核戦争の惨状を全世界に訴え、日本政府および東西の核大国に対して、日本の非核三原則を厳守してこれを全世界に拡大し、核兵器の全廃のための措置をとるように文学者として主張すべきではないかと存じます」

埴谷らはこの「お願い」によって文学者の署名を集め、82年１月、「核戦争の危機を訴える文学者の声明」を発表した。

吉本はこの「お願い」「文学者の声明」について次のように言う。

「……埴谷雄高の賛成した『反核』は、その声明文に明確なようにソフト・スターリニズム一辺倒の反核で、決して米ソ両核大国の核戦備に対し抵抗するところの反核ではない、というのが厳密な事実である。……老いの心弱さをスターリニストに衝かれて、あんな『反核』に名を連ねちゃったんだ。そして米ソ両核体制を根柢的に否定できないような反核はまやかしだと主張して反対を公表したのが、きみ〔この文は「主」「客」の対話形式、「きみ」は吉本のこと〕も含めた少数の文学者たちだけだった」(『試行』84年11月）。

そして、吉本隆明は、この声明に賛成している栗原貞子なる人物の発言をとりあげ、声明発起人の一人・埴谷の責任を追及する。

「埴谷雄高は、中上健次の『鴉』という短編にたいして『このような作品は、ヒロシマ、ナガサキの三十万の死者を冒読し、今なお放射能の後遺症に苦しむ三十七万の被爆者を侮辱し、世界の反核運動に立ちあがった民衆に挑戦するものです。全国からとどくであろう抗議文のすべてを「群像」の次号に掲載し、「群像」編集部の不明を謝罪して下さい。』(栗原貞子「雑誌群像への抗議」）などという空恐しいことをいう「文学者」といっしょに、文学者「反核」運動の発起人になったんだということを忘れないでほしいよ。……栗原のような発言にあるのは左翼的であることが最大の悪である理念であり、正義の倫理と貌をして、民衆や知識人を強制収容したり虐殺したりできる人間のもちうる最低の理念なんだ。これにくらべれば反動を名乗る反動、ファシズムを名乗るファシズム、保守を名乗る保守のほうがまだ許せるんだ。」

吉本はこの点を『海燕』85年３月号の、

埴谷の手紙に対する反論でも重要論点としている。

「文学者『反核』運動は、はっきりした党派的な理念をもった『署名についてのお願い』と『声明』を中心にして集まった運動体」であり、「…文学者の『反核』における貴方は、どういう加減か、戦争責任に不感症な文学者と、レーニン・スターリン主義責任に鈍感で、ソフトにしただけで済まし込んできた文学者と、その同伴者の発起人の間にまぎれ込んでしまった」と吉本はいう。

埴谷はこの批判に対して「署名運動―それは、現在、『責任と無責任を自己のうちに同一に含んでいる』ところの不思議な伸縮性をもったヒドラ的運動体にほかならぬ」とし、「『一点賛成』の『署名運動』」に参加している他の文学者の言動や理念は自分のあずかり知らぬこととしている。また、埴谷がこの発起人の一人になったことで「何十年もの思想的な営為が一夜にしてなし崩し」になったとする吉本に対して、埴谷は「文学の本質は、フランソア・ヴィヨンがひとを殺傷し、窃盗しようと、或いは、ドストエフスキイがツァーに向って請願の手紙を書こうと、それで、その『何十年もの思想的な営為が、一夜にしてなし崩し』になってしまうほど、弱いものではありません」とこたえる。

反核をめぐるこの吉本・埴谷の応酬について、われわれには次のようなコメントが必要に思える。

第一に、吉本は、栗原貞子の言説を引用して同じ「はっきりした党派的な理念」に立つ埴谷の責任を問題にしているが、これは論争のウマさではあっても埴谷批判にはならないし、実際、埴谷はそのような「同一の理念」にはない。埴谷が問われるべきは、あくまでも「お願い」と「声明」の中身であって、これに賛同した文学者が種々行っている発言の中身ではない。

第二に、「お願い」と「声明」はソフトスターリニズムであろうか。吉本はソ連擁護だときめつけるが、内容はそうではない。しかし、この「お願い」と「声明」は中身が抽象的なので、ソ連擁護派も参加できる。ソ連のＳＳ20の配置を一方の危機要因とみる者も、米への対応措置にすぎないとみる者も統一戦線がはれるというこの中身は、しかし、現実の政治情勢にあってどれほどの有効性をもてるか。われわれは問題をこのようにたてた上で、「お願い」「声明」の無力さを指摘する。

第三に、それでは、反核は、米ソを具体的に等距離批判することがポイントなのであろうか。われわれの場所的現在からすれば、米帝・日帝批判が実践的焦点にはなるが、理論的には米ソいずれの核も人民抑圧の武器であることが鋭く指摘されねばならないし、事実、われわれの米ソ核実験反対闘争はかかる潮流をつくり出してきたのであった。埴谷は、このことを認めるのであれば、反核を、ソ連擁護派とも共闘できるような抽象のレベルに〈ボケ〉させるべきではない。埴谷は、吉本の指摘通り、明らかに後退している。

しかし、第四に、現在のわれわれが推進すべき反核は、従来の〈米ソ核実験反対〉の単純延長線上にはないことが確認されなければならない。核問題を米ソ核兵器の問題とのみとらえて自国の核、とりわけ、第三世界に対する自国核廃棄物の投げすてには無関心という「先進国の反核運動」が大きな反省をせまられているのだ。自分は核にやられたくない、しかし、第三世界への核廃棄物投棄は正面からとりあげようとしない西欧、日本の“人間のくさり”や“ダイ・イン”は、無力・無責任のいい気な運動として自己批判されねばならない。吉本も、米ソの核は問題にしても第三世界に対する核廃棄については眼中にないという感じである。

だが、吉本・埴谷の応酬で第五に問題にすべきは、政治と文学に対する両者のいい加減さである。埴谷は、文学は政治と区別されると主張してきたし、吉本にも従来の説を展開しているのであるが、それならなぜ、埴谷は「文学者」のみを対象に「お願い」を発し「文学者の声明」を出すことに世話をやくのであろうか。反核は、文学とは異なる次元で、政治運動社会運動として、つまり、文学者としての参加ではなく一人民、一市民としての参加を求める運動として組織されねばならない。政治が直接的な基準になりえない位相で政治的結集をはかってそこに意義を見い出そうとするこの自己破産に埴谷は気づくべきなのだ。また、埴谷らの「文学者の声明」に対して自分たちは米ソ両核体制に反対する「少数の文学者」だとする吉本も埴谷と同じ不分明に陥っている。埴谷は本当に「ボケ」てしまって、〈文化人〉の声明をありがたがる社会的風潮に拝脆するまでになったのであろうか。とまれ、埴谷は、「文学者」のみの反核結集をめざした意図を自己の政治―文学論にてらして弁明しなければならない。また、吉本は、埴谷の「反核」参加でもって　埴谷の文学そのもの評価に直結させる自分の論法について、これまた自己の政治―文学論にてらして弁明しなければならない。自己の政治責任を問われるときは文学者であることをタテにする政治マニア。他人追及に際しては政治マニアそのものの文学者。埴谷は前者、吉本は前後者とも持ちあわせている。いや、両者とも、自己矛盾、との指摘に、〈核は超政治問題〉と答えるかもしれない。しかし、そうなれば従来の所説はひっこめてもらわねばならない。

私はのんきな一売文業者…

■一転してへりくだる吉本

埴谷は吉本に対する二度目の手紙（『海燕』85年４月号）を最後の手紙と規定し、その後半で吉本に「遺言的苦言」を呈示している。

「苦言呈示の思いは、一編集者から一冊の大判の雑誌をもらったことから惹き起されました。その大判の雑誌は、一九八四年No四四六の「ａｎ ａｎ」九月二一日号で、その見開きの両ページに「現代思想界をリードする吉本隆明のファッション」と題された二枚の写真が掲げられています。

最初の写真には、多くの書物に囲まれた広い書斎で、一六〇〇〇円のセーター、一三八〇〇円のタンガリーシャ

ツを着ながら原稿を書いているあなた横向きの姿が写されていますが、この書斎の天井から垂れているシャンデリアもテーブル、ランプも豪華だと思いながらも、あなたの勉強ぶりに感心こそすれ、苦言などありません。わたしが衝撃をうけたのは、次のページの写真でした。

……あなたは、六二〇〇〇円のレーヨンツィードのジャケット、二九〇〇〇円のレーヨンシャツ、二五〇〇〇円のパンツ、一八〇〇〇円のカーディガン、五五〇〇円のシルクのタイを身につけ、そして足許は見えませんけれど、三五〇〇〇円の靴をはいています。このような「ぶったくり商品」のCM画像に、「現代思想界をリードする吉本隆明」がなってくれることに、吾国の高度資本主義は、まことに「後光」が射す思いを懐くことでしょう。

吾国の資本主義は、朝鮮戦争とヴェトナム戦争の血の上に「火事場泥棒」のボロ儲けを重ねに重ねたあげく、高度な技術と設備を整えて、つぎには、「ぶったくり商品」の「進出」によって「収奪」を積みあげる高度成長なるものをとげました。

……〔先日〕NHKTVに……「今夜はみんな地球人」という、いわゆる特別番組がありました。……タイの青年が発言して、日本を「悪魔」と呼んだことを、恐らくアジアの数箇国の青年からでしょう、忽ち拍手が起りました。

さて、そのタイの青年が、この「現代思想界をリードする吉本隆明のファッション」のCM画像を眺めたら、どうでしょう。

あなた自身は、「米ソ両核体制を根底的に否定」する少数の文学者のひとりだと自己規定していますが、アメリカの世界核戦略のアジアにおける強力な支柱である吾国の「ぶったくり高度資本主義」のためにつくしているあなたのCM画像を眺めたタイの青年は、あなたを指して、「アメリカの悪魔の仲間の日本の悪魔」と躊躇なくいうに違いありません。」

吉本は埴谷の「遺言的苦言」に『海燕』85年5月号でこたえている。のみならず吉本は革命の見通しについても自説を展開する。まず、埴谷に対する直接の応答から確認しよう。

「貴方の今度の手紙にもあるようにレーニンはかつて国家公務員の給与が、一般大衆の給与を上回ってはならないことをしばしば懸念し、警告いたしました。……国家公務員の給与が一般大衆の給与を上回ってはならないという一見ささいなレーニンの発言には大きな意味があったのです。

ところで、貴方や最低のスターリン主義者たちが、公務員でもなんでもない私的な一個人の住居や部屋の天井にぶらさがった「シャンデリヤ」や「家具」に注いでいる意味あり気な視線には、いったいどんな意義があるのでしょうか？　私にはどうかんがえても品性の「卑しさ」を語る以外の理念的意味があるとは思えません」

「埴谷雄高さん。貴方は御自分が他人の私的住宅や着ている衣服に注いでいるその「卑しい」視線が、未来の理想社会を造ったり、民衆を解放したり、弾圧や強制収容所のない自由な社会を実現することと、少しでも関わりがあるとお考えですか。私の理念的把握に誤りがなければ、そんな（貴方たちの）視線は、民衆の抑圧や強制収容や自由の剝奪や、個々の市民や一般大衆に監視の眼をそそぐ秘密や公安の警察に関係があっても、いっさいの解放の課題には関係のないものです」

吉本はこのように埴谷の「卑しさ」を批判しつつも、その上で自宅について説明し、書斎の「シャンデリア」は建売住宅の応接間を書斎に転用していることの結果。家の大きさは「貴方の御夫が亡くなられたとき、焼香にうかがった折に拝見した一人住まいの貴方の家に比べて、四倍はおろか二倍の大きさもあるまいと存じております」「もちろん、在野の一売文家がじぶんの仕事場に「シャンデリア」を付けようが、大ローソクを付けようが、けい光灯を付けようが貴方や同類からとやかく云われる筋合いのものではありません。……貴方や同類のやっていることは、資本制的な倫理以前の、閉じられたアジア的共同体の専制意識に共通した迷蒙にしかすぎません」という。

吉本は、「国家公務員の給与が一般大衆の給与を上回ってはならないという一見ささいなレーニンの発言には大きな意味があった」としながらも、自分は「公務員でもなんでもない私的な一個人」「在野の一売文家」であってそのような視線を受けるいわれはない、とするが、「なんでもない」「一売文家」とはうまくいったものである。この人物は、自分自身が言ったことはすぐ忘れるという特徴があるにしても、この文章を書いた半年前には大岡、埴谷を相手に「六〇年安保闘争の延長線上に位置した八四年現在における、もっとも正統なたたかいの姿と態度」をもつ者として自己を規定したのではなかったか。「革命」と「解放」について語り、自分を「もっとも正統」なたたかう人間としながらも、自宅をのぞき込む視線に対しては「公務員でもなんでもない」「一売文家」(別の個所では「のんきな一売文業者」）とするのは逃げでなくてなんだろう。公務員が視線を受けねばならないのであれば、「革命」「解放」の「もっとも正統なたたかいの姿と態度」をもつものは「卑しい視線」を受けて当然であろう。吉本は、生活と感性において大衆になり切れない知識人の“原罪”について、全くの転換をしたように思えてならない。

“芸術性をかってCM出演”

■衣料ファッションの宣伝バイト

ところで、吉本はCM画像登場について次のようにのべている。

「「コム・デ・ギャルソン」の衣服は高すぎるのでしょうか？　もちろん、ファッションの最終理想からいえば、高価でありましょう。けれどもそれは貴方の「死霊」七章が廉価普及用の文庫本に比べたら高価であるのと同じ意味においてであります。そして、貴方が「死霊」を文庫本にでもして廉価に読

者に提供しないのに、「コム・デ・ギャルソン」のファッション作品を高価だという根拠は全くないと考えます。

デザイン会社（資本）や出版社（資本）のCMに従事したからといって資本一般を肯定していることになるのなら、賃労働者は資本主義に異議申立をすることが不可能だということになります。」（『海燕』85年５月号）

要するに、吉本はデザイン会社のCM登場も出版社の出版物キャンペーン従事も、賃労働もすべて同じと言い切るのであるが、続いて吉本は「コム・デ・ギャルソン」のCM登場と、埴谷、吉本がかつて行った「死霊」七章出版記念講演（1976年５月、北大講堂、東北大川内校舎、京大講堂）の同一性を説明する。

「「コム・デ・ギャルソン」のファッション・デザインの作品は貴方の「死霊」七章に芸術性で劣ることは決してない」「……「コム・デ・ギャルソン」は私たちが「現在」そのデザイン芸術性を世界に誇りうる最上のデザイナー集団だとおもいます。私はそのデザイン作品を着た写真姿のじぶんの人相を恥しいとおもいますが、その写真姿がコム・デ・ギャルソンのCMを務めていることを恥しいとは思っていません。」

吉本によると、「死霊」七章もコム・デ・ギャルソン作品も芸術性において同等であり、しかも、「死霊」出版の記念講演旅行もコム・デ・ギャルソンのCMも、資本をもうけさせている点でも同じであって、前者は肯定、後者は否定、とはならない、という。

吉本はさらに立ち入って「コム・デ・ギャルソン」の芸術性を説明するために自分が1985年１月に京都新聞に書いた一文を紹介する。

「昨年〔84年〕十一月下旬、「東京国際コレクション85」の催しで川久保玲〔コム・デ・ギャルソン主宰者〕のファッション・ショーをみた。翌十二月には山本寛斎のファッション・ショー「寛斎元気主義」をみた。ふたつの間にもうひとつみたが、この際、それはのけておくとする。いままでファッションショーのイメージは、映画、テレビ、雑誌のグラビアなどをつなぎあわせて、じぶんなりにこしらえ上げていたが、じっさいショー会場まで出向いてみたのははじめてだった。

川久保玲のファッション・ショーも、山本寛斎のファッション・ショーも、それぞれちがった意味で、前からわたしがもってたファッション・ショーの通念を、まったくうち砕くものだった。

川久保玲のファッション・ショーは、印象をひと言でいえば、日本人でこれだけやれる人がいたのかという内心の思いにつきる。化粧ひとつしない（とみえた）金髪、白い肌のモデルたちに着られた衣装は、その金髪、白い肌にたいしてすこしの妥協も気負いも、ましてエキゾチシズムでみせようとするけれん味もなく、破格の格調をみせながら、しかもさり気なく張りつめた形と色できっ抗していた。」

「このデザイナーのファッション・ショーをみ、ファッションが人体と釣り合いながらも人体と対立して高次な表現になりうることをはじめて知った。やってる人がいるんだなとおもってたいへんな刺激をうけた。」

吉本のこの文章から我々は次の諸点が確認できる。

第一に、吉本がファッション・ショーを実際に見たのは84年11月が初めてであったこと。第二に、実際に見たことによってそれまで持っていたファッション・ショーにたいする通念がうち砕かれたこと。そして第三に吉本は「ファッションが人体と釣り合いながらも人体と対立して高次な表現になりうることをはじめて知った」こと、である。

だとすると、吉本は次の諸点に答えねばなるまい。

第一に、コム・デ・ギャルソン作品は「死霊」七章に劣らぬ芸術性をもっていたというのが84年９月にCM登場した理由になっているが、吉本自身が京都新聞に掲載した文章によると、生まれて初めてファッション・ショーを見たのが84年11月であり、この11月にこれまでの通念がうち砕かれたことになっている。つまり、11月の事柄が９月の行動を説明する根拠になっていて、時間関係が転倒している。吉本はこの時間的な前後の転倒について説明が要求されよう。

第二に、吉本はCM画像について「コム・デ・ギャルソン」の芸術性を主張しているが、吉本が２枚の画像で引き受けているCMは、書斎写真がMENS' ZOU ZOU（セーター、タンガリーシャツ）、室外写真がコム・デ・ギャルソン（ジャケット、シャツ、パンツ、タイ、靴）とアルバタックス（カーディガン）のミックスである。吉本は、MENS' ZOU ZOU、アルバタックスも、ファッション・ショーをみたこともない84年９月段階からすでに「「死霊」七章に劣らぬ芸術性」をもっていると判断していたのであろうか。

吉本は芸術性あふれるコム・デ・ギャルソンのCMをしたことにしたいのであるけれども、これは吉本自体の文章からして無理である。吉本は「「アンアン」という雑誌は、先進資本主義国である日本の中学や高校出のOL（貴方に判りやすい用語を使えば、中級または下級の女子賃労働者です）を読者対象として、その消費生活のファッション便覧の役割をもつ愉しい雑誌」というが、60歳男性の吉本に肩がややズリおちたジャケットを着せて「アンアン」にCM登場させているファッション・メーカーの狙いは、OLへのファッション便覧の提供でもなければ、ましてや、コム・デ・ギャルソンとアルバタックス両ファッション・センスの“ミックス芸術”の誇示でもなかろう。「ねぇ「吉本隆明」て知ってる？　知る人ぞ知るインテリ界の大御所だよ」というCM写真の添え書きがデザイナー側の吉本起用の意図をよく示している。狙いは〈インテリ界の大御所ともおつき合いねがえている自分たちのファッション・デザイン〉の知的ステータス（?!）とやらをOLに売り込むこと、これが吉本起用の意図と判断すれば誤りであろうか。

「アンアン」は「無垢の大衆」

■資本「流出」は後進国向上にも寄与?!

しかし、それならば、吉本のＣＭ画像はまったくの「ホマチ仕事」であろうか。吉本のＣＭ登場は、革命の未来にたいする吉本の把握がバネになっている。吉本は、その革命把握を「世界史の中心の構造的変化」と呼んでいる。

「私は「革命」の主要な課題は、すでに先進資本主義体制の世界史的な「現在」と「未来」の在り方の問題に移ったと考えております。そして世界の先進資本主義体制下の賃労働者とその階級が生活水準、思想的な自由度、生産技術の水準で、ソビエト・ロシアの労働者の階級を超えてしまった地域から、つぎつぎにレーニン・スターリン主義の政治的意味は無化されてゆくだろうと考えております」（『海燕』３月号）

「「革命」とは「現在」の市民社会の内部に膨大な質量でせり上ってきた消費としての賃労働者（階級）の大衆的理念が、いかにして生産労働としての自己階級と自己階級の理念（およびそれを収奪している理念と現実の権力―その権力が保守党であれ革新党であれ―）を超えてゆくか、という課題だと考えております」(同３月号)

吉本は『海燕』３月号で述べたこの見解を、埴谷のＣＭ画像批判への反論（同５月号）でより詳しく説明していく。吉本は「アンアン」を「愉しい雑誌」と評価したことにつづけて次のように述べる。

「やがて「アンアン」の読者である中学出や高校出のＯＬたち（先進資本主義国の中級または下級の女子賃労働者たち）が、自ら獲得した感性と叡知によって、貴方や理念的な同類たちが、ただ原罪があると思い込んだ旧いタイプの知識人を恫喝し、無垢の大衆に誤謬の理念を植付けるためにだけ行使しているまやかしの倫理を乗り超えて、自分たちを解放する方位を確定してゆくでありましょう。それは「現在」すでに潜在的には招来されつつあると私は考えております。

埴谷雄高さん。その日はいつ顕在化されるのでしょうか？　すくなくとも理論的にはその日付を指定することが可能です。それは先進資本主義「国」の賃労働者が、週休三日制を超えたときからだともいえます。そのとき消費としての賃労働者と生産としての賃労働者とは自己対立を媒介にして、はじめの抑圧勢力（それは貴方や理念的同類のようなスターリン理念であっても、保守的な資本理念であっても同じです）を超えるために、あらゆる場面でたたかいをはじめるでありましょう。」

「日本の先進資本主義が賃労働者の週休二日制の完全実施を容認する傾向にあることは、百年まえのマルクスが見聞したら、驚喜して祝福したにちがいないほどの賃労働者の解放にほかならないのです。」

それでは、この消費万歳、レジャー万歳の吉本は、「先進国」と「後進国」の関係をどのように把握しているのであろうか。吉本は埴谷にこたえていわく。

「……アジアやアフリカの後進地域に、投下資本、商品輸出、技術開発として押し出されたときには、貴方が述べる「タイの青年」のように、「日本を悪魔」と呼ぶ民衆もでてくるような否定面を持つでありましょう。しかしこのばあいでも流出された投下資本、商品、技術、知識は、同時に後進地域の「近代化」や「現代化」に寄与し、生活民衆の水準の向上に寄与していることも確かなことなのです。先進資本の後進地域への流出は、利潤獲得の運動であるに過ぎないとともに、地域にとっては高賃金化高生活化でもあるからです。

……日本の資本、技術、開発を生活を向上させてくれた「福音だ！」と叫ぶタイの青年を発見することも可能なことは申すまでもないことです。本源的な蓄積についてのマルクスの考え方から推察できることですが、彼ならば、「征服、圧制、強盗殺人」を伴わないかぎり、一般に先進資本の後進地域への流出はその地域の階級問題とは、ほとんど無関係だと断言すると思います。」

「……私が改めて申すまでもなくタイや東南アジア地域は日本の植民地ではなく……

……カンボジアと要らざる戦争をやらかしているタイの国家権力や、民衆の三分の一も虐殺してしまったポル・ポトや、好戦的なホー・チミンの責任と農業理念の誤謬を……批判しなくてはならないのです。それなくして貴方はどうして、先進資本主義国の恵まれた中級または下級の女子賃労働者の、消費生活の雑誌に登場しているのんきな売文業者吉本隆明の「晴れ姿」に到達できるでしょうか。」

『ゆたかな社会』に浮かれて…

■消費に万歳三唱の吉本

吉本がＣＭしているコム・デ・ギャルソンの芸術性云々はともあれ、吉本がファッション・コマーシャルに登場する思想的背景は上記の引用でかなり明白となったろう。

吉本は「先進国」と「後進国」の関係を切断する。吉本には西洋の現在が第三世界に対する過酷な支配と収奪の上になりたっていること、日本の現在が明治以降のアジアに対する侵略と抑圧を重要根拠にして成立していること、をみない。それどころか、資本の「流出」(侵略でもなければ進出でもなく「流出」）は、利潤獲得がねらいとはいえ近代化、現代化、民衆の生活水準の向上にも寄与するという！　「征服、圧制、強盗殺人」をともなわないかぎり、階級問題とは無関係という。

一体全体、帝国主義の侵出で、征服、圧制、強盗殺人をともなわないものが今迄に存在したろうか。吉本は「伴わないかぎり」というが侵出には必ず伴うのである。いや、吉本は反論するだろう。これまでは伴っていたか現下の日本の「流出」は「征服、圧制、強盗殺人」を伴っていないと。だが、吉本に聞こう。経済的な征服、経済的な圧制、経済的な強盗殺人は「征服、圧制、強盗殺人」ではないのか。このような「流出」が「後進国」の発展を抑制し、日帝に好都合な原材料市場、商品市場に「後進国」を歪少化さ

せ、巨大な搾取・収奪機構の中に「後進国」を組み入れていることを吉本はまったくみようとしない。しかも、吉本は「コム・デ・ギャルソン」のことになると、「「コム・デ・ギャルソン」は、アジアの後進地域への資本流出など何の関係もなく、もっぱらフランスを根拠地として欧米や日本などの先進資本主義国の消費生活を市場としている」という。

しかし、「消費生活の雑誌に登場しているのんきな売文業者吉本隆明の「晴れ姿」」は本当に「後進地域への資本流出など何の関係もない」と思っているのだろうか。日本の〈繁栄〉は「後進国」の収奪と無関係ではない。町中には安く買いたたかれてきた〈MADE IN アジア〉製品がハンランしているではないか。コム・デ・ギャルソンのデザイン室はパリか原宿あたりなのだろうが、その糸、布、はどこで生産されているのか。

東南アジアの原状に日本帝国主義の冷酷な経済支配をみず、アジア民衆の苦しみはタイ国王、ポル・ポト、ホー・チミン派の責任とする吉本は、国内把握でも資本が全くみえなくなっている。週休二日制容認の傾向を百年まえのマルクスが聞いたら驚喜して祝福するだろう、だって！　マルクスの核心は賃金奴隷制の廃止ではなかったのか。「アンアン」の読者は、「自ら獲得した感性と叡知によって……自分たちを解放する方位を確定してゆく」「無垢の大衆」だって!!　一体、無垢とは何だ！　いや、吉本は「アンアン」の読者を無垢と規定したいのであり、これは吉本のイデオロギーを表白するものであろう。

〔付〕本稿を脱稿（85年９月７月）してから一カ月、10月３日付朝日新聞夕刊に「男のファッション革命進行中」と題して最近のブームを紹介する記事が出た。「……百貨店のメンズバーゲンともなると、開店前に千人もの男の行列……独立して五年目のメンズのデザイナーが、たちまち年商十億円をかせぐ。……「コム・デ・ギャルソン」は、もとは女性ブランドでデザイナーも女性の川久保玲さんだが、昨年の年商七十五億円のうち半分以上の四十億円はオム、男ものの売り上げ。川久保さんの成功に刺激されてか、コシノ・ジュンコ、島田順子さんら女性デザイナーのメンズ進出も目立ち始めている。……東京・新宿の伊勢丹では、昨年からヤングを対象にしたメンズのバーゲンを始めたが、これが大当たり。「バイトの金をためてきた」「バーゲンなら小遣いで好きなブランドが買える」という男の子たちが、開店前に長蛇の列を作る。」

吉本は人間の活動と解放を生活と生命の生産を基底に—自然との質料交換、そこにおける人間諸関係—において把握しなくなった。吉本が日本資本主義の高度成長、「構造的変化」なる浮力に引き上げられた世界は、消費の充足、拡大の世界——『ゆたかな社会』である。一九五〇年代の米の繁栄を背景に書かれたガルブレイスの『ゆたかな社会』も第三世界論の欠如が特徴であるが、吉本の〈アンアンの社会〉も同じ特徴をもつ。しかし、ガルブレイスは、吉本ほどには消費礼讃ではない。生産者（資本）が広告、コマーシャルによって欲望をデッチあげること、「ゆたかな社会」ではこのデッチあげられた欲望と見栄による欲望が中心基軸とするのがガルブレイス理論の一つのポイントであって、米資本主義絶讃論といわれたガルブレイス理論も、「愉しいファッション雑誌」にむらがる「無垢の大衆」は「自ら獲得した感性と叡知によって……自分たちを解放する方位を確定してゆく」とする吉本ほどには「のんきな売文業者」でなかった。

庶民・吉本の完全解体

■「重層的な非決定」＝「主題の喪失」

吉本は現下の思想状況を次のように整理している。

「先進資本主義「国」のもとで、主題を失ったレーニン・スターリン主義と、それに同伴する思想は「現在」どこに雪崩れているのでしょうか。おおざっぱな見取図でいえば、ひとつは貴方が二度目の私あての手紙で、典型的にやっておられるように、抑圧された民衆の姿を虫めがねで探し求めて、アジアやアフリカの後進地域に視線を移動している姿があります。一方その裏面では、エコロジーの課題、公害、環境問題、反核、自然食、緑化、身体問題へと退化してゆく部分も存在しています。もちろんそれが一定の意味をもつことを否定するのではありません。ただ主題の喪失の自覚なしに主題の獲得のように思い込んでいることを批判したいだけです。

西欧の先進資本主義「国」で取られているラジカルな理念の方向は、モダニズムとポストモダニズムの姿です。私には構造主義やポスト構造主義の思想が西欧でとっているこの方向性の方が、まやかしの少ない不可避な危機感の表明があるようにおもわれます。」

「ただ私の場所からみえる「現在」は（つまり先進資本主義「国」日本にあっては）、モダンやポスト・モダンに単層的に収束できるように思われないのです。ここでは「重層的な非決定」が、どうしても不可避であるようにおもわれてなりません。」

「「重層的な非決定」とはどういうことを意味するのでしょう？　平たくいえば「現在」の多層的に重なった文化と観念の様態にたいして、どこかに重心を置くことを否定して、層ごとにおなじ重量で、非決定的に対応するということです。」

吉本によると、「抑圧された民衆の姿」は「虫めがねで探し求め」ないと見えないらしいが、これは吉本自身の「構造的変化」の決定的進行を語るものではあっても現実そのものではない。たしかに、日本資本主義の相対的安定「成長」の局面にあって我々は中心部からの後退は余儀なくされている。だが、それは、雪崩でもなければ、「主題の喪失」でもない。我々があくまでも「感性と叡知」をはぐくむ世界、生活と生命をともにする世界は「抑圧された民衆」の世界である。一体、これがどうして「主題の喪失」なのだろうか。我々の「主題」は明確である。

どこにも重心をおかずおなじ重量で非

決定的に対応する、吉本の「重層的な非決定」こそ「主題の喪失」であろう。しかし、これを「主題の喪失」とはっきり呼ばない吉本の現在に、「重層的な非決定」状況の後半段階がうかがえる。「アンアン」のファッション写真は、『ゆたかな社会』『自由の季節』に向かう吉本の「晴れ姿」なのであろう。

思考の場を地球大、アジア大的に設定できず、ナショナルに、いや、東京下町に設定し、インタナショナルはこのローカルの総和でしかなくローカル即インタナショナルとしてきた一思想家は、ローカルの〈繁栄〉を世界そのものとして受け入れはじめた。さらば、吉本隆明。

松戸市栄町６の４１６　蒼志舎　　定価　三百円